

頌春 2016年

「オーデイオと私」



森 繁治

新年明けましておめでとうございま
す。年頭の会報に私の記事が掲載さ
れることに成り大変嬉しく思つております。
今年も皆様のご多幸とA.A.E.Cの益々の発展を願い、新年のご挨拶と致します。

初めての演奏会

昭和三十八年（一九六三歳）上京した
ら是非にと思っていた演奏会を初体
験しました。N響の演奏で固唾をのん
で聴いた第一曲目はモーツアルトの喜
遊曲第一番でした。それは田舎者の
私の耳には極限の美音で一斉に鳴り
始めた弦の音はまるで数万匹の鈴虫
が一斉に羽ばたいた様に聴こえ、この
澄み切った柔らかい音は何処まで高
く伸びて行くのかと思いました。その
時、「こんな音が自分の部屋で毎日聴
けたら」と思いましたが「これが私のオー
ディオへの原点となつた様です。

次の年、FM東海実験局がやつていてH.I.F.I.クラブに入会し、「」で初めて熱心なオーディオの先輩達と出会いました。

オーディオとの出会い

リスト

それから数年後、秋葉原の店頭でY氏と知り合いました。彼は「タンソイを買ったがアンプの選定に悩んでる」と言い、それならとアンプを作つ

グル・アンプを作りました。出来上がり
るとオートグラフがこのアンプを待つ
ていたと言わんばかりに鳴り始めま
した。繊細にして雄大、抜けきつて

昭和四十五年、音友の紹介で十歳先輩のM氏と合いました、私の窮状を話すと即座に「アンプなら球で製作が一番」と言い、アンプの製作方法を懇切に教授の上にオシロや発信機などの測定機まで提供され、その後、酒好きも意気投合して会えば酒盛りオーディオ談義と生涯のお付き合いと成りました。M氏指導のアンプでタンソノイは生き返り私のアンプ探しは終わりました。

アンペの歸と出会い

昭和四十三年、TR（トランジスタ）アンプの新製品が続々と発売されメーカーもオーディオ評論家もTRアンプが最高、球の時代は去つたと歌い上げました。私も管球式のQUILA-Dを処分し国産のTRアンプにしました。しかしこれは大誤算でそれから数々のアンプを買い換える事に成ってしまいました。そして次の年に購入したタンノイ・ヨークは悲惨でした、低音はドロドロ、高音は硬く乾いた音でがつかりでした。

トランジスタ・アンプ

と言うスピーカーを購入。初めて我が家で聴く英國の音は豊かに澄んで今まで使用していたバイオニアのスピーカーはぶつ壊れていたのかと思うほど違いでした。それならとアンプもQ.U.A.Dを購入、これも使用中のサンスイのアンプとは畠然とするほどの違いで当時の日本製品の粗悪さを痛感しました。

タ・ノイ・オートゲテ

その一年後に念願のオーテグラフを購入しました。エンクロージャは国産の進工舎製で鳴らして見ると低域は不明瞭、中高域は新聞の電送写真の様な粗さです。聳え立つスピーカーを前に全身から血が引いて行くのを感じました。良くなかつたのは私のアンプとスピーカーのマッチング不足が原因でしたが、それからこのスピーカーを理想の音にするためのアンプの製作や周辺機器の改善など執念の日が過ぎていきました。

AAF Cに入会

三年前にAAFCに入会させていた
だきました。何時も欠席ばかりの私で
すが会員の方々と会えば瞬く間に話
が盛り上がり旧知の友の様に親しく
して戴いています。そしてそれは同好
の諸氏なればとの嬉しさを身に沁み
て感じています。この紙面を借りまし
て皆様にお礼を申し上げます。

過ぎ去った日々、これまでお世話になりました。先輩諸氏には先立られた方も多く、私も七十五才と成りました。そして良い音を求めて熱く語り合つた日々が懐かしく思い出されます。オーディオに完璧や終わりはなく、それぞれが感動する音楽に導かれて理想とする音を求めて行く、その過程こそが貴重と思っています。

行く美しい高音、熱く湧き上がる音、樂表現に今までの不満や課題が霧の晴れる様に消え去ったのを感じました。K氏と貴重なる名球を譲つて下さったAAFのW氏に感謝するばかりです。



リスニングルーム アンプ類の 設置場所